

一神教と多神教をめぐる ディスコースと リアルポリティーク

Overview

- 一神教と多神教をめぐるディスコース
——日本における動向を踏まえて
- オリエンタリズム、オクシデンタリズム、
リバーズ・オリエンタリズム
- 見えざる偶像崇拜
- 構造的暴力と直接的暴力
- まとめ

一神教と多神教をめぐる ディスコース ——日本の動向を踏まえて——

日本における動向

・梅原 猛

—「私は、かつての文明の方向が多神教から一神教への方向であったように、今後の文明の方向は、一神教から多神教への方向であるべきだと思います。狭い地球のなかで諸民族が共存していくには、一神教より多神教のほうがはるかによいのです。」

(『森の思想が人類を救う』小学館、1995年、158頁)

千と千尋の神隠し (Spirited Away)



日本における動向

- 「『千と千尋の』精神で一年の初めに考える」
(『朝日新聞』2003年1月1日、社説)
- 「文明の対立」が語られている。背景にあるのはイスラム、ユダヤ、キリスト教など、神の絶対性を前提とする一神教の対立だ。(中略)いま世界に必要なのは、すべて森や山には神が宿るという原初的な多神教の思想である。そう唱えているのは、哲学者の梅原猛さんだ。古来、多神教の歴史をもつ日本人は、明治以降、いわば一神教の国をつくらうとして悲劇を招いた。そんな苦い過去も教訓にして、日本こそ新たな「八百万の神」の精神を発揮すべきではないか。

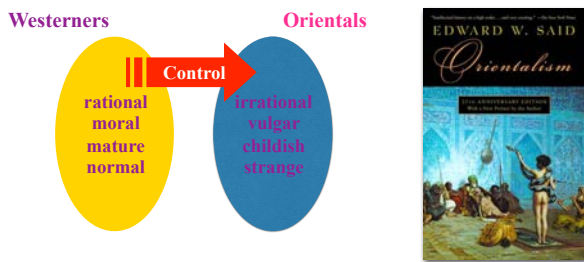
【復習】「近世の宗教」より 異質なものに対する対応の歴史

- キリスト教に対する憧れと恐怖
 - 虚像と実像の混在
- 禁制以降、「切支丹」のイメージが貧困化し、虚像が増殖していく。
- 今日の「一神教 vs 多神教」のディスコースにもつながっていく。

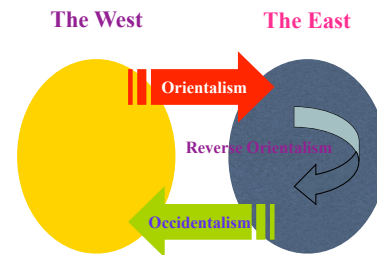
一神教と多神教をめぐるディスコース

1. ユダヤ教・キリスト教・イスラームは唯一の神を信じる宗教であるから、対立・衝突を避けることができない。
2. 戦争や自然破壊など、現代世界の問題は一神教（文明）に帰するところが多く、日本の多神教（文明）こそが一神教的思考の限界を乗り越え、問題解決に貢献すべきである。
3. 一神教は排他的・独善的・好戦的・自然破壊的であるのに対し、多神教は寛容・協調的・友好的・自然と共生的である。

オリエンタリズム (Orientalism)



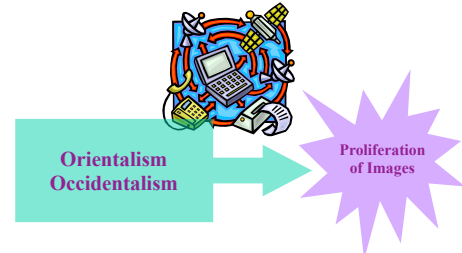
オクシデンタリズム、リバーズ・オリエンタリズム



補助線としての「見えざる偶像崇拝」

- ヘブライ語聖書は、異教の神々への礼拝をアヴォーダー・ザーラー (Avodah Zarah) と呼び、目に見える偶像 (pesel) に限定していない。
- 偶像：支配の象徴 (例：古代世界における王)、人間の欲求 (欲望) の投影と増殖。
- 金・銀・石などで刻まれた偶像が担っていた象徴的力は「見えざる偶像」へと容易に転化される。

見えざる偶像崇拝

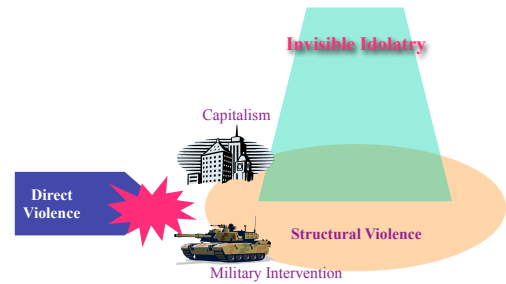


偶像崇拜の現代的意味

・パウル・ティリッヒ (Paul Tillich)

—偶像崇拜は、予備的関心を根源的関心にまで高めることである。本質的に制約を受けているものを無制約的なものと考え、本質的に部分的なものを普遍的なものにまで高め、本質的に有限なものに無限の意味を与える（現代の**宗教的民族主義**の偶像崇拜は最も良い例である）（『組織神学』原著1951年）。

構造的暴力と直接的暴力



現代における偶像破壊 (iconoclasm)

・バーミヤンの仏像破壊 (2001年3月12日)

—見える「偶像」として



・The World Trade Center (2001年9月11日)

—資本主義の富と暴力を体現した「偶像」として



・The Pentagon

—軍事力を体現した「偶像」として

絶望と歓喜を引き起こす

まとめ

- 日本における一神教と多神教をめぐるディスコースは、**オクシデンタリズム**と**リバース・オリエンタリズム**の複合体（→**見えざる偶像崇拜**）として、特定のイメージを拡散させ、**構造的暴力**となる危険性をもっている。
- 軍事的攻撃（**直接的暴力**）により「悪」を根絶することを目指すよりも、**構造的暴力**（→**見えざる偶像崇拜**）を認識し、それを抑制・改善していかなければならない。
- 一神教的な考え方と多神教的な考え方を排他的・敵対的にならない形で関係づける必要がある（→多様性の認識）。